

鎌倉楽しむ会

令和六年秋季勉強会資料

「講座」

「神仏習合と分離の歴史」

鎌倉楽しむ会 企画責任者

清藤 孝 編

令和六年十二月二十日

まえがき

今日、世界遺産に登録されている建造物に、アテネ・パルテノン神殿、南米ペルーのマチュピチュ遺跡など多数あるが、その主な目的は「祈り」の場であった。

しかし、その神聖な「祈り」の場は、その他にもヨーロッパ、東南アジア、中国など多数存在するのですが、何らかの理由をもって廃墟と化し遺跡となつて、現代では観光地として大きな役割を担っている。

そして、私見ですが、遺跡群は本来の「祈り」は失われてはいますが、「神」は存在しているはず。唯、祭祀を司ることが失われているだけなのです。その祭祀を復活させられるなら、世界の争いが少しでも和らぐこととなるかもしれません。

また、これらの遺跡について数々の歴史物語として、研究者の間で「祈りの目的」が

失われ廃墟化していく過程などの、その話題性の探求はこれからも続いていくものと思われます。

翻つて、我が国の世界遺産木造建築の「法隆寺」は、聖徳太子により、約千四百年前の推古十五年(607)に建設されたと伝わり、連綿として千四百年間「祈り」が続けられている。また、京都の下鴨神社は古代の豪族「賀茂氏」が紀元前九十年ころ信仰したのが起源で、初代天皇の神武天皇のご即位には多大な貢献をしたと伝わり、「賀茂建角身命(かもたけつぬみのみこと)」をご祭神として京都守護の神社として崇められている。

また、「春日大社」に於いては、藤原鎌足の創建と伝わり、護景二年(768)、称徳天皇の勅命で、左大臣藤原永手によって現在の地に社殿が建設された。そして、氏寺としての「興福寺」は、鎌足の妻「鐘大王(かがみのおおきみ)」が天智八年(669)山階寺として創建し、夫の鎌足が造立した「釈迦三尊像」をお祀りしたのを起源とするという。その他にも、歴史を遡り連綿と「祈り」が続けられている我が国の社寺の多さは、諸外国にはあまり例をみないのではなからうか。それは、我が国の「天皇制」の存在がなせることではないかと私見として推考するものです。

歴史を辿れば、「倭(やまと)」から「大和・平城京」そして「京都・平安京」へと、藤原鎌足を祖とする藤原摂関家から天皇制を確立する「権力」が生まれ、そして、「天皇」という「権威」を自然と創り上げてきたことが最大の素ではないかと考えるのです。

「祈りの起源」

今から一万二千年前から、約一万年続いたと学問的には定義づけられている「縄文

時代」以前から、自然現象への畏怖が感謝という形で「祈り」が生まれてきたのではなからうか。

煌めく天体、太陽、月、地上では大きな岩石、巨木、川、海、お山全体などへの畏怖は、稲作の農耕が伝えられてきた三千年前の弥生時代にはさらに強まり、そして、この「農耕」が、水利と土地の開拓と拡大を繰り広げ、そして、より多くの自然の恵みを得ようとする人間の行為が、また、その領地を守り拡大していくとする行為が、今度は人間同士の争いの因ともなっていくのです。また、その争いが現在までも続いているのではなからうか。

神武天皇のご即位

第四十代天武天皇の発願により、これまで各地に口伝(くでん)で伝承されてきた事柄を、太安万侶(おおのやすまろ)が命じ

られ、そして纏め上げ、帝紀としての「**古事記**」が編纂され、第四十三代元明天皇の御代和銅五年(714)に献上された。

内容は、天地のはじまりから、第三十三代推古天皇まで書かれている。

神話から書き始められて、地上がまだ軟弱な粘土のような土地であったが、それを伊弉諾(いざなぎ)、伊弉冉(いざなみ)命が固め、大八島を作り上げ、そこを守るあらゆる「神」を作り上げていく。しかし、ここに事件が起こり、「火」の神・加具土命(かぐつちのみこと)が誕生した時、伊弉冉命が全身に火傷を被い「黄泉の国(よみのくに)」へと身罷って、穢れの身となってしまいうです。

その穢れの妻・伊弉冉命を、夫・伊弉諾命は生き返らせ天上界に呼び戻そうとするのですが、これに失敗し逆に穢れてしまう。急ぎその穢れを「阿波岐原(あわきがはら)」にて禊ぎして穢れを祓うに祓う。

「この禊ぎ祓いの行為は「祈り」の原点となり、現代でも神事の「祝詞」として必須奏上されているのです。」

その時に、その祓いの中から、天照大神、月読神、須佐之男命の三貴神が示現され、天照大神は「万物生成の神」、須佐之男命は地上へ降臨し「豊葦原中国」とよあしはらのなかつくにを「水穂の国」へと開拓し豊饒な土地としていく。

その「豊葦原水穂国」へ、天照大神の孫・瓊瓊杵尊(にぎのみこと)が降臨なされ、木花咲夜姫(このはなさくやひめ)と結ばれ地上を支配していくことになるのです。

そして、地上世界の「国津神(くにづかみ)」を配下に治めていくのですが、なかには荒ぶる国津神も存在するので、それ等すべてを平定し、瓊瓊杵尊から四代目、天照大神からは五世孫となる「ヤマトイワレビコノミコト」は、大和橿原(かしはら)の地で、初代の天皇(すめらみこと)に「神武天皇」

として「即位されるのです」。

仏教公伝

天武天皇は、また、日本という国の存在を諸外国にも知らしめるため、「漢文」で書かれた日本の公式歴史書「日本書紀」の編纂を命じられ、舎人（とねり）親王を中心に（藤原不比等も加わる）二十年の歳月をかけ、養老四年（720）第四十四代元正天皇に献上された。

内容は、天地開闢からはじまる神代から第四十一代持統天皇までの三十巻からなる日本の歴代天皇を中心とした歴史書となっている。

そして、第二十九代欽明天皇紀の項には、欽明十三年（552）、朝鮮は「百済国（くだら）」の「聖明王（せいめいおう）」から、「釈迦仏の金銅像一体、経論若干」が贈られてくる。このことが「仏教の公伝」として言わ

れるものなのです。

しかし、天皇の忠臣である「蘇我稲目（そがのいなめ）」と「物部尾輿（もののべのおこし）」との間で、「崇佛論争」が始まり、これが両豪族の雌雄の争いにまで発展し、この対立は、第三十一代「用明天皇」の御代（587）、さらに深まり、世代は代わった「蘇我馬子」と「物部守屋」の間では軍事行動となっていくのです。この時、蘇我氏側の勢力に加わったのが「厩戸皇子（うまやどのおうじ）」で、後の「聖徳太子」であり、そして、蘇我氏が物部氏を壊滅してしまうのです。

「ここから、歴史は「蘇我氏一強」となり、「仏教」は文化の一面を持ち、次第に朝廷の政治体制に影響及ぼす様になり、さらに興隆していくのです。

そして「蘇我馬子」は天皇家と深く結びつき、三十三代推古天皇紀（女帝 593～620）には天皇家の上に位するような振る

舞いも目立ち、日本古来の神々を崇敬する朝廷に仏教を広め、「神」と「仏」の習合（しゅうごう）が少しずつ始まっていくのです。

神仏習合

蘇我馬子は、現在に残る明日香村の石舞台古墳に見られるような大きな権力を有し、その子「蘇我蝦夷（そがのえみし）」も大和政権の「大臣（おおおみ）」の地位に就かせ、政権を独占していった。

それに大いなる危機感を抱いたのは、「中臣鎌足」であった。鎌足は、「中大兄皇子」に近づき密会し、ついには、第三十五代皇極天皇紀の**大化元年（645）乙支の変**を起し、蘇我氏を滅亡させてしまう。

しかし、蘇我氏の崇拝した仏教は聖徳太子（574～622）が、法隆寺や四天王寺を創建するなどますます朝廷内に重用され、また、信仰以外にも政治体制に利用してい

く傾向が強くなってきた。

「日本古来の神々」は目に見える姿として、神の依代(よりしろ)を求め、ご神木や大きな磐などを対象として降霊の場としてきたが、仏教は「仏像」という形で目に見える姿で「現世利益(げんせりやく)」を表すことにより、天皇家にも都合よく利用されるようになってくる。

そして、公家社会から「本地垂迹説(ほんじやくせつ)」として現れ、天照大神は大日如来、八幡神・応神天皇は阿弥陀如来などとして解釈されていくのです。

大仏開眼

ここからは日本書紀から時代は下って、四十五代聖武天皇(701～766)の御代、巷には疫病が流行り朝廷の要人も多く亡くなります。その為か、聖武天皇は仏教に救いを求め、天平十三年(741)全国に国

分寺・国分尼寺を建立の詔を出し、国家の混乱を鎮め、安寧を願っていくのです。

また、天平十五年(743)には大仏造立の詔を発し、行基大僧正などの大きな協力を得て、国家プロジェクトとして、天平勝宝四年(752)、四十六代孝謙天皇の御代に完成し、そして、「大仏開眼供養」が盛大に行われたのでした。

このように「仏教」が国家宗教と見間違ふようになって行きますが、第四十八代称徳天皇の御代・天平神護二年(766)には、弓削道鏡は「法王」となり、天皇の座を篡奪するやの勢いを見せたが、「和氣清麻呂」による「宇佐八幡宮」の神託により道鏡は失脚し下野国薬師寺に流され、皇室の危機は去っていった。

*ここで、勉強不足の疑問ですが、伊勢神宮や出雲大社などの歴史は2千年以上前の創建で「皇室」の「祖」となるのですが、何

故？都から遠く離れた場所になっ
てるのだろうか？私の中ではミッシェル
なり、宿題となっています。

平安時代の神社

天応元年(781)第五十代天皇にご即位された「桓武天皇」は、奈良仏教八宗の政治への介入から逃れるためか、平安京に遷都する決意を固める。いよいよ延暦十三年(794)京都を正式に都と定め、延暦二十一年(802)には、最澄、空海が遣唐使として仏教の先進国「唐」へ渡るのです。帰国した「最澄」は比叡山を「祈り」の場とし、空海は、当初「東寺」を与えられ、のちに高野山へと移り、両者とも密教による鎮護国家を朝廷に提案していく。

閑話休題

東寺と伏見稻荷の関係は、東寺の「五重塔」

は伏見・稻荷山の樹木を使用して建設され、第五十六代清和天皇の病氣平癒に関連し、朝廷より「正一位」の位階を賜り、伏見稻荷の御輿は東寺前で読経を受けるのです。

一方、天武天皇の発願と伝わる二十一年に一度の「伊勢神宮」の「遷宮儀式」は続けられ、また、賀茂神社、宇佐八幡宮、春日大社、鹿島神宮、香取神宮なども「造替」などが国家として進められていた。

また、平安中期の延長五年(927)に編纂された「延喜式神名帳」には二千八百六十一の神社名と三千百三十二座の祭神が記載されているが、その中には、**仏教を融合させた別当**が管理を行う「**神宮寺**」という形態の神社も見受けられるようです。

平安時代の末期・康平六年(1063)創建の鎌倉・鶴岡八幡宮は、後に「**神宮寺**」となり「鶴岡八幡宮寺」と言われ、大塔も建立さ

れていた。

実朝の暗殺者の「公暁」は、比叡山で得度し、鶴岡八幡宮寺の別当に就任していたのである。

朝廷の仏教

藤原鎌足の次男・藤原不比等から始まる天皇家への外戚は、朝廷政治に介入し、後には摂関制度を確立し権力を掌握し、談山神社、春日大社、興福寺、平等院など創建し、藤原道長は後年、**出家**するという仏教に帰依する生涯となっている。

また、藤原摂関政治から朝廷政治への移行を強力に推し進めた天皇は、「治天の君」と歴史上語られる、延久四年(1072)践祚した第七十二代「白河天皇」であった。

そして、自らは、天皇の御位を皇子へ譲位し、上皇から**出家して「法皇**」となり「院政」を推し進め藤原摂関政治を衰退させて

いく。一方、自らの武装警護のため「**北面の武士**」を設置し、これが後々の武士政権の「芽」となり、白河法皇亡き後の皇位継承の争いに関与していき、「武家政権」の到来をも見えてくるのです。

また、仏教の力が公然と認められてきたのか、比叡山や興福寺なども「僧兵」という存在を供え、仏法による朝廷への政治圧力団体を持つようになってきた。

鎌倉仏教の輩出

平安時代は約四百年続くのですが、前期・中期と大きな争いはなく、死刑ということも余り聞かないが、後期に入ると、俄かに皇位継承問題も絡み、保元元年の(1156)「保元の乱」、平治元年(1159)の「平治の乱」を経て武家政権の嚆矢となる「平清盛」が抬頭。その後、治承四年(1180)から元暦二年(1184)から始まる「源平合

戦」で「源頼朝」が我が国初めての「武家政権」を樹立させるのです。

そして、この源平合戦では多くの「命」が奪われ、「**命の儚さ(はかなさ)**」を感じたのか、北面の武士「佐藤義清(のりきよ)」は、「**西行**」として仏門に帰依していく。また、源頼朝は蛭ヶ小島に流された時、^{もてと}鬚のなかに、小さな仏像を持ち、日常は父・義朝への読経を欠かさなかったと伝わる。

鎌倉時代は平安時代とは場面がガラリと変わり「命」が簡単に失われていく。このことも関連するの、栄西(えいさい)「ようさい」の禅、法然、日蓮、道元、親鸞たちが、それぞれの宗旨を主張した「仏教宗派」を立ち上げ、平安時代は朝廷と貴族の仏法であつたが、それを武士世界から庶民の間まで燎原の火のごとく広まっていく。そこには、「目に見えない神」と「現世利益の見える仏の世界」が文盲(もんもう)の多い庶民の間にも融合した「祈り」となってくるので

す。

そして、武門には「禅宗」が主として受け入れられ、北条得宗家、室町時代の覇者「足利家」などが建長寺、円覚寺、天龍寺などを建立していくのです。また、力の付いた「**町衆**」は精霊を祀り「悪霊」を祓う行事として、「祈り」の原点を「**祇園祭**」などに求め、そして盛んにしていくのです。

町衆文化の芽生え

殺伐とした武家集団の鎌倉時代の世相から、室町時代(建武三年＝1335)を切り開いた「足利尊氏」は、都を「京都」と定め、帰依する「**夢窓疎石**」を開基として、後醍醐天皇を弔う「天龍寺」を歴応二年(1339)創建したという。

また、三代の「**義満**」は「南朝」と和解し、足利一族の守護大名を纏め上げ、室町幕府として君臨していく。

さらに、後年「**北山文化**」という「雅」な世界を展開し、「能」「狂言」の芸術を育て理解し、母が順徳天皇の孫娘・紀良子の影響が、神道と仏教を融和させた朝廷政治を展開していくようにも見受けられるのです。

しかし、六代将軍・「足利義教」は嘉吉元年(1441)暗殺され、さらに十一代将軍の「義輝」も永禄八年(1565)暗殺され、八代将軍義政は「**東山文化**」を創るが、その時、「応仁の乱(1467～1477)」を引き起こし、第十五代義昭将軍が元亀四年(1573)、「織田信長」により追放されるまで、約二百年続いた室町幕府は、ここで終焉し、戦国時代に突入していくのです。

また、雪舟や池坊による「**水墨画**」「**生け花**」「**茶の湯**」など、様々な文化が花開き、また、蓮如の門徒宗の肥大化、ザビエル、フロイスによる異教の布教と貿易など、次第に庶民もその恩恵に触れ、その中から「**町衆**」という大きな財を成した人たちが現れてく

る。

町人文化の華開く

戦国時代を制した**織田信長**は、キリスト教布教の許し、城下町へ楽市楽座の町作り、堺港の南蛮貿易など革新的な君主であったが、心半ばで暗殺され、後を継いだ「豊臣秀吉」も、「茶道」を発展させ、豪華絢爛の**醍醐の花見**、陶芸、絵画などの文化の粋を育てて行く。

慶長五年（1600）関ヶ原の戦いを制した「徳川家康」は、当初は寒村であったという江戸城に入府し、すぐさまインフラの整備にかかり、全国の大名に天下普請を命ずるのです。そして、江戸の町は城下町作りのため、国中から男衆が集まり、空前のワールドラッシュとなり、その陰では、建築材料業者や吉原遊郭、また、蕎麦、寿司、天ぷらなどの食文化も華開き、日本橋魚市場の賑

わい、越後屋、白木屋、大丸なども活況し、世界でも最高の百万人の大都市となつて行くのです。

そして、庶民に少し余裕が出来てきたことから、レジャーも兼ねた「大山詣で」「富士講」「お伊勢参りラッシュ」「蟻の熊野詣で」など盛んになり、また、川柳、俳諧、講談、歌舞伎など文化絢爛の平和な時代が到来してきます。

急速に出来上がった江戸の町は「長屋」の借家住まいが当たり前でしたが、この町内を守る神様として「**お稲荷さん**」が一大ブームとなり、町内には必ずお稲荷さんの「祠」が奉られるようになった。

そして、江戸幕府は大名を「参勤交代制度」で統制したが、庶民の統制は「**寺請制度**（てらうけせいど）」を設け戸籍は必ずお寺に有り、旅に出る時には「**寺請証文**」を携帯しなければならなかった。また、「**神社**」はお寺の住職を「**別当**」に任命し管理させて

いった。

国学の勃興

これまで書き込んできましたが、仏教が朝廷や公家世界に習合されてから、神事と仏事の合一は庶民の間でも普通のこととなり生活の一部となっていた。

しかし、室町時代に仏教・道教・儒教の思想を取り入れた「吉田神道」が興り、江戸時代まで全国の神社・神職を支配下とするような勢いがあつた。

そして、江戸中期には「古事記」「万葉集」「律令」「延喜式」などの日本古来の文献から、日本本来の姿を見出そうとする「**国学**」が提唱されてきた。

その提唱者は、摂津国の「**契沖**（けいちゅう）」、「伏見稲荷神職の「**荷田春満**（かだのあずまろ）」、「**賀茂真淵**（かものみぶち）」、「**本居宣長**（もとりのりなが）」、「**平田篤**

胤（ひらたあつたね）たちで、次第にその波は、その時、頻繁に出没する外国船に対処する幕府内にも浸透していった。

幕末には、隣国「清」の中国が、イギリスのアヘンの策略により植民地化されてしまふ。そして、我が国は「ペリー提督」の開国要求を受け入れて、間もなく長州・薩摩の連合軍による倒幕が本格化し、慶応三年（1867）ついに二百六十年続いた徳川江戸幕府は明治新政府に引き継がれていくのです。

明治新政府の「神道」

六百八十年続いた武家政権から、漸く、スツキリと「天皇制」を確立した明治新政府は諸般に亘り、欧米の制度を採り入れる日々の目まぐるしい状況であった。

さらには政権の運営はさることながら、「天皇」のもとに国民を統一しなければと

いう大問題があった。それには、まず神代からの皇室の「天照大神」の尊崇を第一とし、「天皇」を「神」と仰ぎ奉ることから始めることであった。そして、朝廷内からは一切の異教は排除されていった。

次に始めたのは、お寺の「寺請制度」の廃止を行い、明治元年（1868）三月には「神仏分離令」が公布され、神社からは一切の仏教用具が排除されることとなり、「王政復古」を成し遂げた明治新政府は、「国策」として「国家神道」の方針を掲げ明確化させていくのです。

廃仏毀釈

そして、翌年には「廃藩置県」も発布され、藩主は領地を失い東京移住を強制され、藩士の俸禄は明治新政府が保証し、僧侶は還俗し神職になった者も多数あり、混乱は数年に亘ったのである。

また、新政府の「国家神道」と「神仏混淆」の徹底の方針は、多くの別当寺は廃寺に追い込まれ、その他貴重な建築物、梵鐘、仏像などが破壊され、または持ち出され海外へと渡っていったものが多数あったようです。

この仏教の排除行動は全国に及び、各藩により解釈が違いはあるが「廃仏毀釈」は法律ではないが、寺院は苦境にたたされることとなり、安徳天皇を祀る「阿弥陀寺」は明治政府により「赤間神宮」となり、宮内庁で守られるようになった事例は稀であるが、殆どの寺院は「廃仏毀釈」の被害に遭遇したのは確かである。

あとがき

約千五百年前に伝来した仏教は、教義は勿論のほか、国家形成の政治手法や、建築の技法、農作物の拡大育成法、気象学など、

先進の学ぶべきことも多数あり、聖徳太子は大いにこれを活用し、国家の発展に尽くしていったのである。

飛鳥時代から平安時代中期にかけては、朝廷の繁栄安泰、貴族世界の現世利益（げんせりやく）の「雅」な世界を展開し、古代から連綿と祈られてきた神々とは、自然と抵抗もなく融合し「神」と「仏」は国家の柱となっていたのです。

しかし、平安時代後期から、武者世界到来の兆候が見え始め、また、民衆を対象とした鎌倉仏教が興り、その教えは少しずつ広がっていった。また、武家政権に移行しても、朝廷は崇められ、その政治手法は公家社会からも学んでいく。

このように、「神」と「仏」の習合は千年の歴史を刻んできたが、明治新政府の誕生と「王政復古」の嵐は、一時的に「分離」させられてしまうのです。それが昭和二十年（1945）の終戦まで続くのです。

軍の国から平和な民衆社会となった現在には「信仰の自由」となったが、明治新政府の怨霊である「神仏分離令」のDNAは未だに拭い去れないこととなっているようです。

しかし、お正月は神社への初詣、お彼岸・お盆には、先祖詣りと、現在は何ら抵抗なく「神」と「仏」は、形は「分離」しているが、心の中では一致していることは明白と思われる平和な国となっているのです。

以上「神仏習合」と「神仏分離」の文章でした。お読みくださり誠にありがとうございます。

完

鎌倉楽しむ会

令和六年秋季勉強会資料

企画責任者

清藤孝 編

付記

現在の神仏混淆とみられる神社とお寺。

- ① 栃木 日光東照宮と輪王寺
- ② 浅草 浅草寺と浅草神社・被官稲荷
- ③ 上野 寛永寺と上野東照宮
- ④ 芝 増上寺と芝東照宮
- ⑤ 大津 比叡山と日吉大社
- ⑥ 奈良 興福寺と春日大社
- ⑦ 那智 那智大社と青岸渡寺